

大谷學會春季大會紀要

征服王朝佛教史論

本學教授 野上俊靜氏

東部アジアの狀勢を見て來ると十世紀の初頭から大きな變化が認められる。それは北方民族が急激に擡頭して大きな勢力を持つて來る丈でなく、此れが南の方へ押出して來ている。而も、それが從來の中國への倭人とは異り、領土的野心の下に、計畫的、恒久的に中國に襲來し、中原の一部、若しくは全部を支配して漢人をその統治下に置いた事である。即ち、遼、金、元の國家が其れであつて、斯様な異民族の建てた國家を史家は征服王朝と呼ぶ。かかる從來王朝と異つた國家に於ける佛教はその國家的性格に影響されて特異な面を有するものと思われう。而して、その一例として元の佛教に就いて考察して見よう。

元は十三世紀の初頭から一世紀半位の命脈を保つたが、征服王朝として中原を支配したのは百年程である。此の元に於いては佛教が非常に盛んで、或る面に於いては中國史上一番盛大であつたとも言える。大體、中國佛教史上の崇佛皇帝としては梁

の武帝に指を屈するが、しかし、廣大な版圖を有する元朝が國力を擧げて行つた佛教事業には、其の物量に於いては遠く及ばないのである。此の元朝諸帝の崇佛を評して史學は溺佛であると言つてゐる。又、二十四史中佛教關係の記載が一番多いのは元史である事からも推察し得るのである。換言すれば、元朝の歴史が佛教を除外しては考えられない事を端的に示してゐるものであろう。

所で、其れ程盛大であつた元代の佛教が元の滅亡と共に消え去つて仕舞い、次の明朝には殆んど其の名残りを留めないものである。言い換えれば、征服王朝の元から次の漢族國家である明朝への轉換期に於いて、此處に佛教史の流れを見た場合、凡そ半分の面に斷絶が認められるのである。而して、此の點が從來史家の疑問とされている所であつて、此れが解決に當つては、元朝に受容された佛教の性質と、其の存在の仕方を考察して見なければならぬ。

さて、元代の佛教は大體二重になつてゐると云える。即ち(一)蒙古朝廷・貴族と蒙古人政權にまつはつてゐる少數色目人・漢人官僚、そう言つた社會上層部間に受容せられていた佛教と、(二)征服王朝支配下の中國一般民衆社會の間にずつと古くから受容傳承せられて來た佛教との二元的性格を持つたものであつた。尤も、此の二元的であると云ふ事は佛教のみでな

く、一般に征服王朝の持つ宿命的性格ではあるが、その征服王朝の二元的性格を宗教の面に最も良く現わしているのが元の時代である。

前者は、チベットに源を發するラマ教であつて、此れが元朝の崩壊と共に其の影を失い、後に残つて、明代の佛教として歴史上に表われて來るのは後者である。

さて、蒙古朝廷・貴族、少數漢人に受容された佛教の性質としては、(一) 佛事法要の佛教であり、全くの儀禮佛教である。元朝諸帝は國家の命で、國璽を傾けてやたらに法要許り營んでゐる。元史の本紀はこう言う記事で充ちてゐると言つても良い程であり、此れに依つて如何に元の朝廷が佛事法要を行つたかが判るのである。又、次に擧げられる特徴としては、(二) 造寺造像が盛んに行われた事である。元朝諸帝はそれぞれ素晴らしい寺を建ててゐる。世祖の建てた護國仁王寺、聖壽萬安寺、英宗の建てた壽安山寺、等其の代表的なものである。そして、寺を建てるときには國家の事業として此れを行い、費用は國璽を持つて之に充てた。即ち、建寺等には行工部國家の土木事業を行工部の出張所一を置き、中央政府の有力な役人を長官として工事一切を監督し、入夫が必要な時は軍人を使役した。そして寺が出来ると、寺を維持する爲に又役所を設けて之を維持したのである。兎に角、寺を建て像を造ると言つた建築を主とする佛教、換言すれば、建築佛教であつた。

それから、そう言つた正史の記載を見て氣がつくもう一つの時徴は、元の佛教は譚經佛教であつた事である。例えば、大徳十一年六月、内郡、江南、高麗、四川、雲南の諸寺の僧に勅し

て藏經を誦せしめて福を祈つたと言ふ記載がある。斯様な記載は元史に幾等でも出て來る。が兎に角、儀式を行い、經を誦して福を祈ると言つた特徴を有する佛教が元朝政權、上層階級に受容された佛教であつた。「僧人は宜しく佛書を誦すべし、官事には豈預かるべけんや」と元史に在るのは其の事を如實に示してゐるのであらう。又、此等と一緒に免囚運動も行われており、此れ亦、當時の佛教の墮落の一面を物語つてゐる。

所で、こう言つた佛教の根柢にある思想は何かと言へば、修功德の思想である。修功德の爲に、儀禮を行い、建築佛教を行い、誦經佛教を行つたのである。言い換えれば、修功德は條件であつて、修功德其のものに宗教的意義を認めただけではない。全てが修功德と言ふ手段に依つて、極めて卑近な人間の幸福を得ん爲に行うのであつた。

こうした佛教が依存してゐる階級は元朝帝王、蒙古人貴族、少數漢人官僚の上層社會であつた。従つて、此の階級の没落と共に跡形も無く消え去つたのも、一般民衆に依存してゐなかつた佛教の當然迎へべき運命であつたらう。

元朝政權の崩壊は上述の如き貴族佛教から絶えず壓迫を受けた所の民衆間に受容傳承されていた佛教を基幹とせる團體によつて行われた。即ち順帝の頃の韓山童、韓林兒等に率いられた白蓮教匪が元末に蒙古政治の破端の間隙を突いて宗教一揆として現われた。此れ等の農民暴動的性格を持つ此の宗教一揆を利用し、次の明を建てた朱元璋が反蒙與漢の民族運動として發展せしめ、遂に元朝を崩壊せしめたのである。

之を要するに、元より明への佛教史上に於ける斷絶が元朝に

受容された佛教の在り方、一般民衆と懸け離れた上層階級に依存する佛教なり、其の性格、即ち修功德の爲の佛教であつた所に其の原因があると思ふのである。従つて、宗教の在り方、佛教の在り方がどう言ふ風な具合でなくてはならぬかに就いて、こうした元の宗教から明の佛教への推移の間に何かを教えて呉れるものがあると思ふのである。

古佛教における國家觀

高野山大學々長
文學博士 中野義照氏

しばしば、佛教は現實に對する關心が薄いといふ非難がなされる。しかし、もとより佛教思想は現實社會の動きと無關係なものではあり得ない。インドにおいて、初期の佛教は國家社會を如何に見たか、が今の私の課題である。

インドの社會を構成するものは、①内容的に言へばカストの制度及び組合（諸種の職業組合・宗教上の組合など）の組織であり、②地理的に分かつては都市・村落・森林が多少づつ文化の層を異にして存在する。①と②との構造を含んで、ある時代にある國家が成立することとなるのである。

この様なインドの國家・社會の様相について、梵書までのバラモン文獻が描く所は極めて空想的であるにも拘らず、（その成立が第四世紀を過らぬと考へられる法典・家庭經よりは確かに時代的に先立つ所の）初期佛教文獻におけるそれらの記述は

甚だ寫實的具體的である。佛教は出世間的な悟りの教であると同時に、一面またインド社會を導く強力な國家思想・社會思想をもつてゐたに違ひないと考へられる。佛陀の誕生した時代が、まさしくインドにはじめて國家らしい國家或いは國家聯合が出現した時代と合致してゐたことはその一つの因由であつたであらう。

初期佛教時代のインドは、所謂十六大國が並立してゐたが、その中、マガダ・コーサラ・ガンサ・アゾンティの四王國が強大であり、特にマガダは最も富強を誇つてゐた。共和國として特筆すべきはグヅジーである。グヅジーは八國の聯盟より成る共和國で、中でもヴィデーハトリッチャヴィイの上部族が有名である。この國は第四世紀の頃まで約八百年に亘つてインド史上に盛名を留めてゐる。このやうな古代諸國家のそれぞれの氣風、それぞれの性格は、後々、インドの地にさまざまな廣大な國家の興亡が繰返されたにも拘らず、永く矢はれずに保持されて行つたのである。

さてグヅジーの如き共和國を *sarajya* と呼ぶ。佛教がその教團を *sarajya* と呼稱したのは「組合」といふ語から採つたのである。しかし、「組合」を意味する語は數多あるのに、その中に「共和國」なる意味をも有した *sarajya* の語が選ばれたのは注意すべきことである。それについて阿含大般涅槃經中のグヅジーの七法の記述は重要である。佛陀自身共和的精神の持主であり、共和國に存在してゐた種々の制度や種々の仕方を取り用ひて僧伽の制が定められた、と考へるのである。

佛陀後二三世代を過ぎてアレキサンダーの侵寇を迎へた頃か